

# 第八講 堤中納言物語

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

蝶めづる姫君の住み給ふかたはらに、按察使あせちの大納言の御むすめ、心に

くなべてならぬさまに、親たちかしづき給ふ事かぎりなし。この姫君のた

まふこと、「人々の花や蝶やとめづること、はかなくあやしけれ。人は、ま

ことあり、※本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」とて、よろづの虫

のおそろしげなるをとり集めて、これが成らむさまを見むとて、さまざま

まなる籠箱かごどもに入れさせ給ふ。中にも、※「かはむしの心ふかきさました

るこそ心にくけれ」とて、あけくれは耳はさみをして、手のうらにそへふ

せてまぼり給ふ。若き人々は、おぢまどひければ、男の童のものおぢせ

ず、いふかひなきを召しよせて、箱の虫どもを取らせ、名を問ひ聞き、いま

新しきには、名をつけて、興エじ給ふ。「人はすべてつくろふところあるは

わろし」とて、眉さらに抜き給はず、※齒ぐろめ、さらに、うるさし、きた

なし、とてつけ給はず、いと白らかに笑みつつ、この虫どもを朝夕に愛し給

ふ。人々おぢわびて逃ぐれば、その御方は、いとあやしくなむののしりけ

る。かくおづる人をば、「けしからず、※ばうぞくなり」とて、いと眉黒に

てなむにらみ給ひけるに、いとどこちなむまどひける。親たちは、「いと

あやしく、さまことにおはするこそ」とおぼしけれど、「おぼしとりたる  
ことぞあらむや。あやしきことぞと思ひて、聞ゆる事は、深くさいらへ給へ  
ば、いとぞかしこきや」と、これをもいとはづかしとおぼしたり。

(注) ※本地…物事の本源・本質。

※かはむし…毛虫。

※耳はさみ…女性が働く時などに、動きやすいように垂れた額髪を  
後ろへかきやり耳にはさむこと。

※歯ぐるめ…当時は成人した女性は眉毛を抜いてまゆずみでかき、  
歯をお歯黒で染める風習があった。

※ばうぞく…俗悪で下品なこと。

### 問一

傍線 a、b、c の意味は次の 1～5 のうち、どれが適当か。最も適当と  
思われるものを番号で記せ。

a なべてならぬ

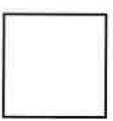
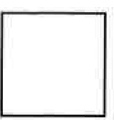
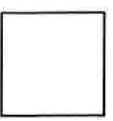
- |           |            |             |
|-----------|------------|-------------|
| 1 並一通りでない | 2 常識的でない   | 3 考え深い様子でない |
| 4 まねができない | 5 遠慮深そうでない |             |

b まぼり給ふ

- |          |         |         |
|----------|---------|---------|
| 1 大事になさる | 2 飼育なさる | 3 防ぎなさる |
| 4 見つめなさる | 5 守りなさる |         |

c おぢわびて

- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1 恐怖を感じ許しを求め | 2 こわがり困り切って |
| 3 ひるみがつかりして  | 4 びくびくし悲しんで |
| 5 ためらい迷惑がつて  |             |



問二 傍線ア「の」と同じ種類のものを次の中から選び、番号で記せ。

- 1 蝶めぐる姫君の住み給ふかたはらに
- 2 大納言の御むすめ
- 3 この姫君ののたまふこと
- 4 人々の花や蝶やとめづること
- 5 男の童のものおぢせず、いふかひなきを

問三 傍線イの「これ」は次の1～5のうちどれを指すか。番号で記せ。

- 1 花
- 2 蝶
- 3 まこと
- 4 本地
- 5 よろづの虫のおそろしげなる

問四 傍線ウ「けれ」と同じ種類のものを次の中から選び、番号で記せ。

- 1 あやしけれ
- 2 心ばへをかしけれ
- 3 心にくけれ
- 4 おぼしけれ

問五 傍線エの「興じ給ふ」の主語は次の1～5のうちどれか。番号で記せ。

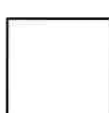
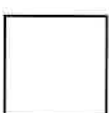
- 1 蝶めづる姫君
- 2 按察使の大納言の御むすめ
- 3 若き人々
- 4 男の童
- 5 親たち

問六 傍線オの「おはするこそ」の語の下に補う語として次の1～5のうちどれが適当か。番号で記せ。

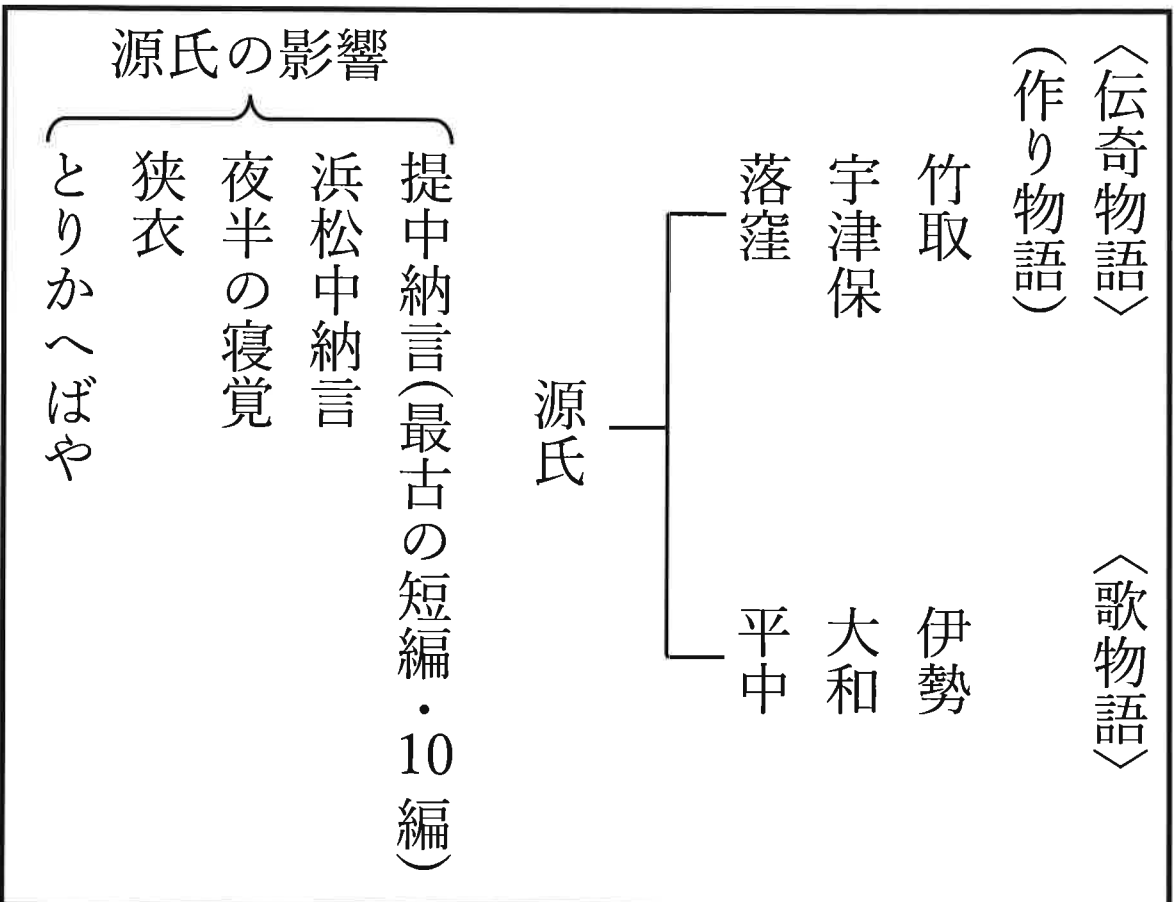
- 1 あらむ
- 2 困り侍れ
- 3 よけれ
- 4 ありがたけれ
- 5 悲しう侍る

問七 この文章の載る「堤中納言物語」は平安末期に成ったものとされるが、この作品より明らかに後に成ったと思われる作品は次の1～5のうちどれか。番号で記せ。

- 1 曾我物語
- 2 源氏物語
- 3 落窪物語
- 4 大和物語
- 5 宇津保物語



# 第八講



こころにくし↓プラスイメージ

- ①奥ゆかしい
- ②立派である
- ③上品である
- ④この上ない

なのめならず  
なべてならず  
例ならず  
おぼろけならず  
おろかならず  
ただならず

並一通りではない  
普通ではない

かしづく  
はぐくむ  
いつく

大切に育てる  
世話をする

かぎりなし【限り無し】

この上ない

はかなし

①頼りない ②むなし ③ちよつとした

はかばかし ←

①はつきりしている ②しっかりしている

# 同格

体言十の：連体形

がにを

※「の」の上の体言を「：連体形」の下に挿入して意味がつかなくなる場合、「の」は同格で「で」と訳す。  
連体形の下に「を・に・が」があることが多い

・色濃く咲きたる木体言同格の形容詞・連体様体うつくしき体言同格が侍りしを

(||色濃く咲いている木で姿が立派な木がございましたので)

・みめのうつくしき体言同格女房体言同格の存続・連体もの思ひたるが、  
物をもいはでゐたる

(||顔かたちの美しい女性で、もの思いにふけている女性が)

・御子の体言同格若君体言同格の過去・連体十になり給へりける過去・連体を、すかし  
こしらへて、

(||御子の若君で、十歳におなりになった若君を)

文中の「む」は婉曲か仮定

——む——

「と」の上の「む」は  
まず意志から入る

まもる(目守る)

まぼる(目守る)

①じっと見つめる

②見定める

③防ぐ・守る

まどふ【惑ふ】

①迷う・悩む

②困る

③うろたえる

④動詞+まどふ＝ひどく(く)する

いふかひなし【言う甲斐なし】

①どうしようもない・つまらない

②身分が低い

さらに——打消  
まったくく  
決してく  
ない

うるさし

① わずらわしい・いやである

① 賢い ② 立派である・上手である

わぶ【侘ぶ】

① 嘆く

② つらく思う

③ 困る

④ 落ちぶれる

⑤ (補助動詞的に)くできない・くしかねる

ののしる【罵る】

① 大声でいい騒ぐ

② 噂(評判)になる

ありがたし【有り難し】

① めったにない

② (めったにないほど)すばらしい



かしこし

①【畏し】おそれおおい

②【賢し】すぐれている・立派である

はづかし【恥かし】

①(こちらが恥かしくなるほど相手が)立派だ

②きまりが悪い・恥かしい



お玉じゃくしはかえるの子 ヨドバシカメラ

あへて

おほかた

かけて

さらに

すべて

たえて

つやつや

ゆめゆめ

つゆ

よに

打消

ず(ざり)  
じ  
まじ  
で  
なし

全くない  
決してない  
少しもない

### 桃太郎さん

をさをさ(ほとんど)

いと(たいして)

よも(まさか)

いたく(あまり)

え(できない)

打消

ず(ざり)  
じ  
まじ  
で  
なし

※「よも」は「じ」と呼応する。「よもーじ」で覚えておこう。

※「いと」と「いたく」はほぼ同じ意味なので、「いとー打消」で「あまりくない」、「いたくー打消」で「たいしてくない」となる時もある。



蝶をかわいがる（または、愛する）姫君がお住みになつていらつしやる（家）のお隣に、按察使の大納言の御娘（が住んでいらつしやつて、その娘は）、奥ゆかしく普通でない（||並一通りでない）様子であつて、親たちが大切に育てなされることこの上ない。この姫君がおつしやることは、「世間の人々が（超意識して、私以外の姫君が）『花よ、蝶よ。』と愛するのは、たよりなく不思議なことだ（||まったくつまらなく理解できないことです）。人間には誠実な心があり、物の本質を追求してこそ、その人の有様がおもしろい（または、すばらしい）」と（言つ）て、いろいろな虫で恐ろしそうな虫をとつてきて集めて、「この虫が成長するような（||成長していく）様子を見よう」と（言つ）て、いろいろな虫かごなどに入れさせなされる。中でも、「毛虫が思慮深そうな様子（または、趣深い様子）をしているのが奥ゆかしい」と（言つ）て、明けても暮れても（顔にかかると髪を）耳にはさんで（とめて）、手の平の上で添えふせて（||上に乗せて）じつと見つめていらつしやる。若い侍女たちは（その様子を）ひどく怖がつていたので、男の子の召し使いで、ものに怖がらない身分の低い召し使い（||者）を近くに呼び寄せて、箱の虫たちを取りださせ、虫の名前を尋ね聞き、はじめて見る虫には自分で名をつけて、おもしろがつておられる。「人間はだいたいにおいて（化粧をしたりして）飾りつくろうところがあるのはよくない」と（言つ）て眉毛もまったくお抜きにならない。お齒黒もまったく「わずらわしい、きたない」と（言つ）ておつけにならず、たいそう白い歯を見せて笑いながら、この虫たちを、朝に夕にかわいがつておられる。侍女たちがひどく怖がつて逃げ出すと、この姫君は、たいそう変わった様子（||異様な様子）で大声で言い騒いだ（または、わめき散らした）。このように虫を怖がる侍女たちを「（虫を怖がるのは）けしからん。下品です」と（言つ）て、たいそう黒々とした眉でにらみなさつたので、（侍女たちは、その不気味さに）いっそう気持ちが悪うろたえてしまつた。（姫君の）両親たちは「（娘は）とても変わつていて、（普通の姫君とは）様子が違つていらつしやる（または、異様でいらつしやる）」のは（困つたことだ）とお思ひだつたが、（次は両親の心中）「（姫君には何か）お思ひつきになつてゐること（||お考えつきになつてゐること）があるのだらうよ。（しかしやはり）変わったことだと思つて、（注意）申し上げることは、（姫君は）深くそのようにお答えなされるので、（そのようにお答えなされると言つたつて、別に姫君は何にも言つていない）作者がぼかしてゐるだけ。だからここはさつき授業で説明したように、『さ||おぼしとりたること』をさすから、『深くお考えになつてゐることがあるとお答えなされるので||反抗なされるので』ともつてきてくれ。たいそう恐れ多い（||恐ろしい）よ」と（姫君が変わつてゐることに加えて）この反抗なされることも「たいそうきまり悪い」とお思ひになつた。